

全校の皆さん、おはようございます。

九月も後半に入り、朝晩も過ごしやすくなりました。来月は「衣替え」の時期に入ります。衣替えの歴史は古く、今から一〇〇〇年前の平安時代からだそうです。宮中行事の中で天皇が衣服を着替えるために奉仕していた女官のことを「更衣」と言ったところが語源のようです。

近年は気候の変化や衣服の性能が高まり、「衣替え」をしない家もあるでしょう。しかしながら衣替えをすることで衣服の状態を見たり、収納空間を整理したりすることもできるのです。「衣替え」同様、私自身の生活もまた、見直したいものですね。

さて、今朝は『歎異抄』の言葉を紹介します。『歎異抄』とは親鸞聖人とともに念仏の教えに学んだ門弟の一人、唯円という方が書かれたといわれています。唯円は、聖人が亡くなって二十年以上たった頃に耳の底に残る聖人の言葉をまるで昨日の出来事のように、そのまま著しました。

その『歎異抄』の第十章に「念仏には無義をもつて義とす」という言葉があります。

この言葉にある「義」とは、意義とか意味ということです。つまり、「念仏とは、私たちが考えることを超えている」と解釈します。

では、私たちの「考えていること」とはどんなことでしょうか。親鸞聖人は「義」を「はからい」とも読んでいます。「はからい」とは思い計るということです。

私たちの普段の生活を振り返ってみると、実にさまざまなことに出会い、その出あいを通して、好きや嫌い、損や得といったように、私たちは計ります。人間誰もが自分の人生を思い通りにしたいと思っているのですが、実際は思い通りにならなかったり、失敗したりすることがあります。

「こんなはずではなかった」とか「なんで私だけが」と、思い通りにならない現実には嘆きますが、よくよく考えると私の人生全てが思い通りに、計らいどおりになるのでしょうか。

仏教では私たちの人生の始まりの誕生ということがすでに、自分の思いを超えているとおさえています。つまり人生は自分の計らいどおりにはならないということです。そしてこの計らいを超える「はたらき」を親鸞聖人は「念仏」といわれました。

これで朝の法話を終わります。朗読は下平でした。